

令和3年8月20日(金)14時~16時 第1回花育推進委員会

新潟市花育マスター 中野 節子さん 「花育事業体験報告」 まとめ

- 花の持つ力（東北大震災後、「花」で心が変わる体験）
- 花を嫌いな人はいない（みんな好き）
- 魅力的な花の生産地 ⇒ 新潟の強み

環境問題 少子高齢化 共生社会

⇒ 生き抜くために、新潟の強みである 「花育」（花・緑にかかわる活動） ≡手段・ツール

<新潟市の「花育」のベース(base)> ⇨プラスアルファのステージに

- 花育とは、花や緑に親しみ、育てる機会を通して、優しさや美しさを感じる気持ちを育むこと。花きの多様な機能に着目し、地域活動に取り入れること。
- 新潟市における花育の理念
「食と花の政令市にいがた」だからできる、花の大産地であることを生かし、「花や緑」を育み、五感のすべてでこれを楽しみながら、健全で豊かな心を培い、快適でやすらぎのある暮らしを満喫し、ふるさと新潟の四季が織りなす「花や緑」の自然や歴史、文化を次世代に伝えること

【目標】

花の持つ力を多くの人に体験してもらう

【手段】

- ① 新潟の花のファンを作るための活動
- ② 新潟の花が売れていくこと

【具体的方法(案)】

- 花育マスターとの情報共有「新潟の花の現状と問題点」
 - 新潟が花の産地であることのPR強化
 - 花育マスターはじめ多様な人の意見を取り入れる
 - 教育分野
 - キャリア教育、生活科、PTA 活動で取り組む（小学校～高校）
 - 恵まれた環境を生かして「新潟ならではの花育」に取り組む（幼稚園、保育園）
- ⇒ 「ふるさと感覚」に結びつく

<花育によるアプローチと効果>

●花育 ⇒ 高齢化社会（高齢者）

- ・ 花があるとコミュニケーションが取れる（コミュニケーション能力が高まる） → 仲間づくり
- ・ 世代間交流

●花育 ⇒ 子ども（園児）

【背景】 いじめ、ひきこもり、コミュニケーションが取れない、困ったことが相談できない子ども

- ① 話を聴く ② 自分で理解する ③ 自分で頑張る ④ だめなときは隣に聞く ⑤ そのまた隣に聞く
- ⇒ 自分とお友だちでいろいろなことを解決するトレーニング
- ・ 子どもたちだけで支えあい、教えあう（学びあう）
 - ・ わからないときに「教えて」、「助けて」とヘルプを出せる子ども → 社会に出てからの「心の強み」
誰かに困ったことを伝えられる、自分の気持ちが伝えられる（大事）

●花育 ⇒ 障がいを持つ子ども（発達障害、精神疾患）

- ・ 友だちどうしでケアすることで、新しい輪ができ、「障がいの子ども一緒」という感覚が身につく

●花育 ⇒ 障がい者（施設利用者）

- ・ アレンジメント作品、植えこみ作業 → 出来上がりを見て 達成感、やりがい → 自信になる
→ 適している（適性がある）
- ・ 活動を通し、今まで消費に向かっていなかった マーケットの広まりと、仕事、職業になる可能性

<花育とSDGs>

●花育 ⇒ 小学生（キャリア教育）

- ・ 花に興味がない
- ・ 花の産地とは知らない

⇒ SDGsの視点 環境問題や、未来に自分たちが住んでいける「持続可能な社会」なのか？

（世界の子どもたちが考えている） → 恥ずかしい → 勉強したい → 興味を持つ → 調べる

- ・ 「花とは？」
- ・ 「新潟の花はどういう位置付けなのだろう？」
- ・ 「新潟の農業生産を守るということはどういうことか？」

⇒ 「花育」によって、子どもたちの「心」をどう動かすか（大事）

意見交換まとめ

【「花育」により目指す未来の新潟市】

「緑豊かで、農業が産業として確立した、強い未来」



そのために、 人材育成 人材を次につなげる

《手段》

○ 様々な主体が、それぞれ自信を持って活動しながら、波及して隣と手をつなぐことにより、点と点がつながり、網目のように広がって大きくなる ⇒ 新潟らしい花育

○ 生産サイド、消費サイドを育てながら、小さなものをどんどん作り上げ、大きくしていく ⇒ 新しい活動ができる

“様々な世代に” “途切れずに”

“様々な活動” “自信を持って活動”

“ネットワーク”

